

概 要 報 告

実施期日	令和8年8月5日(水)
部 会 名	小学校 総合的な学習の時間部会

研究主題

願いと学びをつなげる授業づくり

テーマ

『自ら行動して社会を変えよう ～自分たちが未来を創る主人公～』

提案概要

本研究は、「自ら行動して社会を変えよう」をテーマに進めたものである。総合的な学習の時間の提案ではあるが、算数の学習の積み重ねが土台となる教科横断的な学びにもなりえる発表ともいえる。

はじめに、児童の実態から、4月の学年開きの様子では、指示通り動くことはできるが、自分で考えて動くことについては、課題をもっていると感じていた。また、「どんな学年にしたいか」を問うと手が挙がらなかった。受け身な様子が強い子たちだった。どうしたら一人ひとりが自分らしく動けていけるのかということが課題であった。

総合的な学習の立ち上げでは、スクールコラボファンドに助けをいただき、子どもたち一人ひとりの探求の場をもてるようにしたが、実際にやろうとすると、乗り気ではない意見が顕著に見られていた。そのような中、9月ごろから、算数の学習における「探求ログ」のふりかえりから子どもたちの思考の変容が見られるようになってきた。例えば、『苦手な人が分かるような おもしろいゲームを作りたい。』。この言葉からも、これまで積み重ねてきた算数の学び、マイプラン探求学習が活かされてきたのが分かる。このように、子どもたちの心の中に、学ぶ意味や価値を探求できる兆しが見えてきた。『他者への思い』『誰かの学びを支える』『みんなが解きたいような問題を作りたい』といった他者を意識する思いが現れ始め、誰かに届けるために動くようになってきているのが鮮明になってきた。算数での時間で、子どもたちが学び方を学ぶことで、互いに課題解決の喜びを分かち合うような協働的な時間に変容していった。

なぜ、この子たちは変わったのか、

それが「**願い**」という視点。

「願い」とは何か。総合的な学習の時間の見直しをおこなった。

①個別探究

自分のモヤモヤを解決するためにアクションする。

誰にどんなことを届けたいかを思考する。

②①共有の場をつくる

自分の願いを、学年の前で発表をする。仲間に問いかけることで共感を得る。

発表を聞いて相手を尊敬する。「かっこいいな」と思える。

全学年。学校全体を巻き込んでいきたいと思う。

教室の中では足りない。

自分だけの探求から、誰かに届ける探究へと変容していく。

①、②にある手立てから、「願い」が他者と出会うことで、学校全体を巻きこむはばたきフェスに派生していった。子どもたちが中心になって、誰に何をどんな形で届けたいのか、校長先生にも相談した。自分たちの「願い」が確かに伝わるようになってきた。この頃には、ほとんどの子が、自分事になって探求することの楽しさを感じていた。「願い」が育まれていくことで、他者への意識がどんどん広がっていく。各学年の先生へ、地域にみなさんへ、自分たちの「願い」が届く方法を考え実行していった。

はばたきフェスのねらいとして、発表で終わらない『一緒に考える場にしていきたい』という願いを伝え合う場を設定した。

例えば、本離れから、本を読む機会を増やすための工夫。座り続けていることでの健康被害などいろいろあるが、共通していることは、他者に「願い」を届けること。社会・地域の課題を自分たちの手で変えていく。自己実現の具現化を図る、貴重な場となった。

なぜ、ここまで子どもは変わったのか。5つのポイントが考察できる。

①テーマ設定 ②動く（アクション） ③共有 ④講師との出会い ⑤他教科での学習経験

自分の学びに気づけた子の中から、自ら探究テーマを変えて行く子も表れた。本当に自分のやりたいことは何かを発見できたのがわかる。このことから、最初の総合の立ち上げから、問いに対して、ただ調べる作業から、誰に何を届けたいのかに変わり、学びができるようになって終わっていたことが、願いを実現していく場へと変わっていった。

これまで、『自分とは何か』をうまく表現できなかった子たちが、この実践を通して「自ら願いをもち、試行錯誤しながら課題を解決する力」をつけ、自分に自信をもち、児童が自らの考えに責任をもち、試行錯誤を経て、将来的な社会参画への素地を育むことにつながった。

協議の柱及び協議概要

本研究協議では、以下の2点について意見交換を行った。「願いとは何か」「自分らしい生き方の実現、願いを育み支援するための工夫」に焦点を当て、実践上の課題と改善の方向性について話し合った。

1. 本実践のすばらしさ

- ・願い＝他者意識
- ・アウトプットをくり返すことで、みんなができる状況、安心感への素地ができあがった。
- ・子どもたちがやりたいことを先生がきめ細かく見とることが大切である。
- ・そして、誰にも無理なく続けられるようにする。

それが、主体的な学びの土台となるという意見があった。

2. 教師と児童との間で、どんなやり取りがあるといいか

- ・子どもの変化を見とること。
- ・トライアンドエラーをくり返し行う環境づくり。
- ・やってみようにつながる。「こうできそう」から「やってみよう」に変わる。
- ・子どもの思いが爆発しそうな時に、そのタイミングを逃さない。
- ・できたことをくり返していく。

それが、一人ひとりの願いを引き出すポイントになる。

まとめ概要

協議を通じて、児童の願いを実現するためには、「誰かに届けたい」から学びを始め、「アクション」をおこす。地域や専門家など「人との関わり」を通して探究を深めて共有、共感を得る。自己実現をくり返しできた子どもたちは自分に自信を持つようになる。

学習指導要領の前文からも、変容の激しい社会で、他者と関わること。自分の考えを構築すること。その重要性を問われている。本研究で何度もくり返す「願い」とは何か、子どもたちが主体的に動く原動力。みんなにわかってもらいたいこと。今後、「ウェルビーイング」が生きる力の主流となる。より良く生きていくために、他者を含めて、協働的に学んでいく。これをくり返し、学びのサイクルにしていく。子どもも大人も学びは相似形である。探究的な学びはより良く生きていくためのプロセスとなる。

以上の内容を踏まえ、今後の実践においては、子ども一人ひとりの問いや興味を起点とした探究を尊重しつつ、教員がその学びをデザインし、支えていく姿勢が求められる。